

Title	ジャン・スタロバンスキー著 松本勤訳 『J・J・ルソー： 透明と障害』
Sub Title	Jean Starobanski, Translated by T. Matsumoto, Jean-Jacques Rousseau : La Transparence et l'obstacle
Author	奈良, 和重(Nara, Kazushige)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1974
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology) . Vol.47, No.2 (1974. 2) ,p.115- 118
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19740215-0115

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

紹介と批評

ジャン・スタロバンスキー著

松本 勤訳

『J・J・ルソー…透明と障害』

一

甦えるルソー——彼の思想像はさまざまである。

すでに十八世紀の末頃にも、「二重の視点」がジャン・ジャックに注がれていた。彼は政治的英雄になることもあれば、感傷的な英雄になることもある。純粹に内的な啓示の予言者を見る人もあれば、新しい人間、アンシャン・レジームに懐柔されていない犠牲者と見る人もいる、とスタロバンスキーは指摘している。「何ひとつ切り離すことはできない。ルソーは自己自身の透明のうちにおのれを失う〈美しい魂〉である。が、その嘆きと歌は世界におけるひとつの行動となる。そしてこの行動の力は、ルソーがいつさいの力を放棄していると思われるページのなかで、他のどこよりも強力なのだ。迫害に直面して行動することを拒んだために、おそらく彼はその百倍も行動する能力をふしぎな仕方を受け取つたのであろう。ヘーゲルから見れば、〈美しい魂〉は〈形を失つて空中で崩れる蒸気

のように〉それ自体で涸れ尽きる。しかし、ヘルダーリンは、ルソーを嵐に向つて飛びたつた鷲にたとえている。そのなかでもつとも正しいイメージは、おそらく、嵐をつげる厚い黒雲、革命、へきたるべき神々、であろう」(四七九—四八〇頁) という解釈は、いかにもスタロバンスキーの思想詩的な解釈である。

他の箇所では、「ここで一つ付言しておきたい。ジャン・ジャックの意図とは無関係なのだが、彼の思想と生涯の、みずからは予測しえぬさまざまな帰結に関わる問題である。…ルソーの主要な関心は歴史と社会の哲学から転じて、ほとんど全面的に彼の個人的な感性の諸要求へと移行した。ところが、この特異性への沈潜はルソーの歴史的な影響力を弱めるどころか、逆にこれを強めたということとを、われわれは認めざるをえない。ルソーが歴史を変えた(ただ文学を変えただけでなく)とすれば、その作用はたんに彼の政治理論や歴史の見方に影響されて働いたのではない。それはおそらくより重要な点に関して、彼の例外的な存在の周辺で練り上げられた神話から生じているのだ。世間から遠去かるとき、他者にとつて無になるうと望むとき、彼はおそらく心からそう思つていたにちがいない。ところが彼が世間に背を向ける仕方が世間を変えたのである。…『対話』と『夢想』の作家にとつて重大であると思われる唯一の事柄は、未来の人類が彼らの法を改革することではなく、彼らがジャン・ジャックに対する態度を変えることなのである。やがて、後代の人びとが彼を公正に扱うだろうという希望すらが消えてしまふ。彼はひたすら自分の良心と神に訴えかける。しかし歴史に関与

しないこの人間は、そのためにいつそう深く歴史に力を及ぼしているのである」(八八―八九頁)と述べられている。

革命の予言者として、あるいは孤独な反抗者として、ルソーは偉大なる歴史的影響力を及ぼしたが、フランス革命の、そしてロベスピエールやサン・ジュストの理性、真理、正義の祭典のことであるのか、またはわれわれの未完の課題としての理想的ユートピアのことであるのか、スタロバンスキーは何処にも定かに示そうとしない。だが、そもそも本書は、ルソーの政治的イデオロギーを肯定(もしくは否定)すること、彼と思想論争を試みるのが目的ではなく、そのような回答を期待するのは、却つて著者の真意とかけ離れたことであろう。アンビヴァランスな一個の魂、ジャン・ジャックの内面を「透明」と「障害」というイメージによつて、生の実存的次元を精緻に分析すること、そして最後に、「水晶のような透明」を求めて、「石と化した視線」をみずからに向けて、ヴェールで覆つてしまふ孤絶の人を描くことに、スタロバンスキーの視線は注がれているのであるから。

二

スタロバンスキーは、ルソーが孤独のための孤独を求めたのではなく、社会が透明のうちに構築され、すべての精神が心を開く、意識間のコミュニケーションを、透明が一般意志のなかで実現され、「透明が全的であること」を望んでいた、と強調する。しかしながら、つぎの問いかけは、このルソー論自体の問題にかかわつてい

る。

ルソーは、倫理的に十分正当化されない「直接的生」は、社会的人間に課せられる義務から見ると有罪なのではないか、という恐れをいだいているようだ。直接的な正が無罪であるためには、他者がみならずつしりと有罪でなければならぬ。ルソーは孤独な享受の有罪性を、彼が行動と自我の外に出ることを妨げる他者へと転嫁する。「美しい魂はやましい心をいだきつつ、悪のすべてを虚偽の世界に負わせている。陶酔のうちにあつて普遍と個の一致を知ることとは、このように何ものをも修復しないのである。

それどころか、陶酔をいざなう「償い」が正当となるためには、具体的な統一の希望をすべて喪失しなければならない。このような「快い陶酔」が最良のものであるのは、より良きものが無い場合、すなわち人びとの魂の結合や、燦々と光を受けて意識がたがいに結ばれる祭がない場合、対人的な友情がない場合にに限られているのではなからうか(四七―四七九頁)。

ところで、「祭」について、スタロバンスキーは、『新エロイーズ』におけるクララン共同体のブドウ収穫の祭の場面に着目する。

集合的な祭の躍動こそ、ルソーが夢みた透明の公現の一つなのである。集合的な祭の高揚は、『社会契約論』の一般意志と同じ構造をもっている。公衆のよるこびは、一般意志の抒情的側面を見せ、一般意志の晴れ着を着た側面である。

祭は、『社会契約論』が法理論の平面で表明するすべてのものを、情的機能の「実存的」平面で表現している。公衆の歓喜の陶醉のなかでは、各人は同時に役者であり観衆である。また市民であることの二重の条件に関しては、社会契約の結論のあとで、容易に認識することができる。——市民は「主権者」(soverain)の一員であるとともに、「國家の」(Etat)一員であり、市民は法を欲する者であるとともに法に従う者である。と。「全員がそれだけでいつそうよく結合するように、各人が他者のうちに自分を見、自分を受容するようにせよ。すべての同胞を見、すべての人から見られること。ここに、全員の意志を同時に譲渡し、各人はその代償として集団に譲り渡したものをすべてを受け取るという〔社会契約の〕公準をふたたび見出すことは、困難ではない。(一八三頁)。

つづいて、『社会契約論』の有名な一節「各人は自己のすべてを人に与えて、しかも誰にも自己を与えない。そして、自分が譲り渡すのと同じ権利を受けとらないような、いかなる構成員も存在しないのだから、人は失うすべてのものと同じ価値のものを手に入れ、また所有しているものを保存するためのより多くの力を手に入れる」が引用され、

『社会契約論』が意志と所有 (avoir) の平面で規定したこと
を、祭は視線と存在 (être) の平面で実現する。各人は他者の視

線のなかへ「譲渡」され、^{わづか}「承認」によつて自分に返される。絶対的贈与の運動は逆転してナルシシク自己熟視となる。しかし、このように熟視された自我は、純粹な自由、純粹な透明であり、しかも他者の自由、他者の透明と連続している。これは「共通の自我」なのである(一八四頁)。

さらに、ルソーにとつて祭のイメージは、全員が平等に参加することと、祭の中心に一個の人格を想定することが重なり合つていて、それらは『社会契約論』における共同体の全員一致と立法者のイメージに照応している。確かに、祭は一般意志のあらわれであり、スタロバンスキーがそのイメージとしての構造的類似性を示唆している点は興味深い。しかしながら、一般意志は祭りのたんなる結合行為ではなく、ルソー自身の論理にも明快さが欠けているが、政治の「共同討議」という性質を無視してはならないであろう。

三

ルソーが自己の魂の真実について語るときに、それは伝記的事実の正確さではなく、むしろ自分のイメージをデフォルメさせて、いつそう本質的な自己を露呈してゆく。したがつて、その真実は、検証の常套的な諸法則から洩れてしまうもので、われわれは真実の領域にいたるのではなく、^{イデオロギイ}「真正」(authentique) の領域にいたることになる。

真正とは、距離なく反省なき誠実さがいどの何ものでもなく、

先立つて存在し服従を要求する対象にもはやしたがわぬ自発性、
がいの何ものでもないからである。真正なことは、直接的な衝
撃に対する無頓着な自己放棄のうちに実現される。…対象の境
界を定めようとする反省の慎重な方式に代つて、自由な自己創造
が来る。自我がみずからの源泉を求めて遡及することは、もはや
必要ではない。その源泉は、まさに、ここ、感動が湧出する現在の
瞬間にあるのだから。じつさい、すべてがこれほど純粹な現在に
おいて生起するのだから、過去そのものも現在の感情としてふた
たび生きられるのである。それゆゑ、重要なのは自分を考えること
でも自分を判断することでもなく、自己であることだ。

真正の倫理学では、ルソーの標語「真理のために命を捧げ
る」は、「みずからのために命を捧げる」の同義語となる。とい
うのは、彼が生命を捧げるべき真理はなによりも彼の、真理であ
り、真理との契約は彼自身との契約なのだから。自己であること
という…命令は、あらかじめ設定されている抽象的真理に生命
をゆだねるように強制するものではない。それはただ自分を絶対
的な源泉として認めることのみを強制する(三六五—三六六頁)。

スタロバンスキーの論じている文学的な文脈を離れて、この「真
正」なるものを政治的現実世界に移したならば、一体どのような
なるであろう。ラディカルな、authenticの政治を求めてやまぬ
人びとが、ルソー的な自己表現を主張すれば、おそらくそれは主観
|| 共同体的なアナキーであろうし、そのうえに、自己中心的全能性

が溶け合つた異様な超政治的、な全体論的志向へといざなり危険性す
ら予感されないだろうか。「人間の本質的葛藤が綜合のなかで和ら
ぐとき、人間は神の特権をわがものとするのだ。そのときへ一家の
父」は神に似てくる。彼は自分の所有するものうちに現存し、彼
は自分自身だけでこと足りている。彼にとつて所有(possess)の充実
は、存在(being)の充実と正確に軌を一にしている。彼は自分がつ
ているものすべてのものである。…ヴォルマールは神を信じな
い。しかし、瞑想の満足のなかで——彼はこの満足のなかで自己を
所有し、周囲のすべてのものを所有する——、神に類似したもの
になつてゐる。…クラランの領地は、意識がいたるところで自己
が自己自身にちがいないと認知する場所である」(二二〇—二二一頁)
という言葉は、クラランの政治のなかに射す暗い翳を感じさせるか
に思われる。

すでに述べたように、本書の試みは、ルソー固有の世界に内属す
るテキストのシンボルや觀念を細部にわたつて分析し、揺れ動く彼
の精神構造の内的論理を透過したもので、その限りでは比類なき成
功を収めている。それゆゑに、あえて政治思想に引き寄せて断片的
に論断するようなことは慎むべきであろう。しかしながら、「透明
と障害」は、ルソーの政治思想研究に深みをまし、貢献するところ
の多いすぐれた訳業であることは疑いない。

(昭和四十八年 思索社刊 五〇〇+Viii頁)

奈良 和重